



おいちょう

令和3年 3月 1日

発行 鶴瀬小学校No.14

049-251-0144・0149

文責：校長 松波徳美

学校教育目標 **かしこく《学ぶ》 やさしく《和す》 たくましく《鍛える》**

鶴っ子のめあて

にこにこ

きびきび

ぴかぴか



「ヘレンケラーの心の師」

一塙保己一に学ぶ：あきらめない学問への想い

埼玉県の大偉人の一人、塙保己一は、江戸時代後期に活躍した全盲の学者です。塙保己一は延享(えんきょう)3年(1746年)武蔵国児玉郡保木野村(むさしのくに こだまごおり ほきのむら)(現・埼玉県本庄市)に生まれました。7歳のとき、病気がもとで失明しましたが、15歳で江戸に出て、学問の道に進みます。多くの困難の中、大文献集「群書類従(ぐんしよるいじゅう)」666冊をはじめ、散逸する恐れのある貴重な文献を校正し、次々と出版していきました。48歳のとき、国学の研究の場として現在の大学ともいえる「和学講談所(わがくこうだんしよ)」を創設し、多くの弟子を育てました。生涯、自分と同じように障害のある人たちの社会的地位向上のために全力を注いだのです。そして、文政4年(1821年)2月、盲人社会の最高位である総検校につき、同年9月に76歳の天命を全うしました。

そんな保己一ですが、15歳から江戸に出て、約3年間を盲人としての修業に費やしました。按摩(あんま)・鍼(はり)・音曲などの修業を始めたのですが、生来不器用でどちらも上達せず絶望して自殺しようと思いました。自殺する直前で助けられた保己一は、雨富検校に学問への想いを告げたところ「3年の間たっても見込みが立たなければ国元へ帰す」という条件付きで学問をすることを認められたそうです。胸の中には、いつでも学びたい、たくさんの書物を読みたいという気持ちがあふれていました。

そんな保己一をヘレンケラー(視覚と聴覚の重複障害者でありながらも世界各地を歴訪し、障害者の教育・福祉の発展に尽くした)が心から尊敬していました。ヘレンケラーは幼少時より「塙保己一を手本にしろ」と母親より教育されていたといいます。昭和12年(1937年)4月26日、ケラーは日本を訪れ、人生の目標であった保己一の座像や保己一の机に触れています。ケラーは「先生(保己一)の像に触れることができたことは、日本訪問における最も有意義なこと」「先生のお名前は流れる水のように永遠に伝わることでしょう」と語っています。

これで、三号にわたる、三偉人の話を終わりにします。

今年度も早いもので、3月を無事に迎えることができました。これもひとえに学校を支えてくださるご家庭や地域があつての賜かと思ひます。大変感謝しております。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のために、例年実施できることが、実施できないもどかしい1年でした。子供達が元気に校庭を飛び回る様子や、熱心に学習に取り組む姿をなかなかお目につけられなかったことを、申し訳なく感じています。

ですが、休校期間が2ヶ月あつたものの、子供達は元気に明るく成長しています。特に、最近の子供達の挨拶する姿の素晴らしいことといたらありません。歩みを止めて、目を見ながら丁寧にお辞儀をする児童がたくさんいるのです。先生方の指導やご家庭での声かけが行き渡り、さわやかな挨拶で満たされる朝を迎えることができています。すがすがしい気持ちで一日が始まります。

また、子供達が掃除をする際に無言でもくもくと取り組んでいます。教室や廊下、階段が美しく掃き清められ、ぞうきんがけされ、整理された環境で学習ができています。

鶴瀬小学校の子供達のめあて、「**にこにこ きびきび ぴかぴか**」がまさに実践されています。とてもうれしい姿です。

しあわ
幸せという

はな
花があるとなれば

はな
その花の

つぼみ
蕾のようなものだろうか

つら
辛いという字がある

すこ
もう少しで

しあわ
幸せに

き
なれそうな気がする

ほしのとみひろ
星野富弘

『すいせん』より